

## 109 學年度第一學期 Eurasia 基金會國際講座

### 「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」 (13)

#### 議題：日本近世における媽祖信仰の到来と発展

第13回 Eurasia 基金会国際講座は、天理大学国際文化学部教授で、現在日文系客座教授の藤田明良先生を招き、日本の媽祖信仰の伝播について話してもらった。藤田教授の専門は近世史、国際交流史。今回は台湾でも信仰の厚い媽祖をテーマとし、教授が自分で実際に探訪し蒐集した貴重な資料を紹介しながら、沖縄、九州、本州各地に残る媽祖像から媽祖信仰の伝達路、歴史を観察し、以下の観点から話を進めた。

#### 一 沖縄、九州の媽祖信仰と華人居留地の強い相関性

1. **沖縄**：地理的な関係から、沖縄の媽祖信仰は日本本土より 150 年早かった。15 世紀に明と琉球の船が福州と那覇を往来し、華人は上下天妃宮を建造した。当地の媽祖像遺跡から、琉球国王に仕えた久米村士族魏氏が媽祖を自己の守護神としていたことがわかる。久米島博物館蔵の媽祖像からは、当地の佐久川家が媽祖像を船首に祀り守護神としたことが観察できる。
2. **九州**：1550-1630 年間に多くの唐船が五島、平戸市へやって来て、唐人町を発展させた。平戸市には寺院が数か所あり、例えば河内観音堂の媽祖像は鄭成功父子と関わりがあると伝えられる。最教寺には船首に祀った媽祖像があり、その髪型は明代の女性のそれと似た特徴を持ち、藤田教授によるとこれは日本に現存する最古の媽祖像である。その他に、薬師堂の媽祖は観音像として祀られているが、九州一帯で媽祖は菩薩 (Bosa) と呼ばれ、媽祖が観音の化身であるという考えが中国から来ており、この媽祖観音説によって媽祖がより民衆に受け入れやすくなったという。長崎地方に鎖国政策が実施されると、唐船の入港は長崎のみとなり、九州の港にいたほとんどの華人はここへ集中して移り、「唐人屋敷」を生み出した。当時唐船が入港すると、船首の媽祖は当地の「三唐寺」へ安置された。江戸時代は像を寺院に運ぶ活動がすでに長崎の伝統となっていた。その他、鹿児島、宮崎、大分等では鎖国中、当地の大名島津氏が当該地域を保護したおかげで、多くの華人集落が残った。それ以外に薩摩半島の野間山頂では長く熊野明神と薬師仏が信奉され、島津氏が媽祖像を祀った山は娘媽山と呼ばれ、娘媽山権現 (仏菩薩) の名で多くの漁民に信仰崇拝された。

## 二 江戸幕府と媽祖および本州の媽祖信仰の発展

明清の変遷を記録した文物書籍『華夷変態』は幕府の役人林鶯峰、鳳岡父子によって編纂された。その中で鄭氏と施琅軍の対峙を伝える章節に媽祖に関する記述があり、藤田教授によると、これは伝説であって、史実ではないが、当時の徳川幕府（徳川綱吉）がすでに媽祖の存在を聞いていたことが推測できるという。

1. **伝播経路**：江戸時代の媽祖信仰が本州まで伝播した経路は、まず旅行者の見聞である。次に中国伝来の「天妃」関連の書物。その他に徳川御三家の水戸藩主が媽祖信仰によって藩内の港航路を改善したことで、この信仰が陸海に浸透して徐々に東日本に広がっていった。
2. **北陸と大坂の媽祖信仰**：江戸時代に中国への輸出は大坂と日本海各地の港から長崎を経ることが多かった。これは媽祖信仰伝播の経路でもある。例えば石川県穴水町の「孔雀観音」、福井県普門寺の「天妃媽祖観音菩薩」、大阪の海泉寺、河内国分などにも媽祖像存在の史実があり、北陸と関西地方にも媽祖信仰が伝来したことが実証されている。
3. **東日本の媽祖信仰**：水戸黄門で知られる徳川光圀は東日本の媽祖信仰の流入に深く影響した。光圀が招聘した琴楽書画の心越禅師もまた媽祖信仰をもたらした重要人物である。1690年に光圀は水戸外港の磯原および磯浜に天妃媽祖権現二社を建て、神符に「聖母元君」の称号を入れた。東日本の媽祖信仰は内河航路に沿ってあり、千葉と宮城にも聖母元君の彫像および絵画が伝わっている。最北の地青森の大間にも天妃権現社がある。

## 三 船玉神（船霊神）信仰、媽祖、近代日本の媽祖信仰

続いて藤田教授はなぜ日本人が媽祖を信仰したのかという観点から話した。日本人は船に靈魂があると信じ、造船時に船匠は人形、毛髪等を船内に置き、靈魂としたという。江戸時代中期には、船明神、船玉菩薩のように船神の名諱をその靈魂に付与するようになった。また船玉節を催し、天妃図像を船神にして航海の安全を祈った。日本各地の博物館に所蔵された媽祖系の船玉神の掛け軸や彫像、福井県（越前）の富豪森田家蔵の「船玉明神画像」等から、媽祖信仰が広く伝播されたことが実証される。最後に藤田教授は画中の天妃系船玉神と日本書紀に登場する諸神、例えば旅の守り神猿田彦を比較して、両者の姿や配置が非常に似ていると指摘する。水戸藩後期になると媽祖信仰と関連の権現社は弟橘比賣（姫）神社等に改称され、さらに明治政府の国粹主義が台頭すると、神道政策の高揚と廃仏毀釈運動により日本の媽祖信仰に混同した現象が見られるようになった。日本の媽祖信仰は異なる形態で各神社にあり、青森大間と台湾北港の朝天宮の媽祖信仰に交流があるように、それは今も現代日本人の日常生活の中に存在し続けて

いる、と藤田教授は述べた。

(Web サイト:<https://Eurasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(撰稿:黄馨儀・日文系副教授)

(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)